

# 世界をみつめて1

## イギリスと酒

莊中 孝之



今年の初め、新聞で次のような見出しの記事を読んだ。「安すぎる酒、英国で社会問題化・・・政府が規制検討」。それによると、イギリスでは酒の値段が安すぎるのが、肝臓病や若年層の違法飲酒の原因になっているとの指摘が専門家から相次ぎ、政府も規制検討に乗り出したということである。大手安売りスーパーのセールでは、約300ミリリットル入りのラガービールが50ペンス（約60円）を下回ることもあるという。また飲酒による疾病研究の専門家は、アルコールに起因する病気の治療が国家医療制度（NHS）にとって、年間30億ポンド（約3600億円）の負担となっており、肝臓疾患などによって今後20年間に25万人が死亡すると警告している。

思えばこの国も、酒には大いに悩まされてきたものだ。17、8世紀には、大衆のための新しい酒がロンドンを中心に大流行した。それは1688年にジンの国オランダからオレンジ公ウィリアムが新王として迎えられ、彼がイギリスでその製造を奨励したためである。庶民は厳しい労働からの一時的な逃避を求め、この安くて強い酒に走り、ジンフィーヴァーと呼ばれる一種の狂乱状態が発生した。ウィリアム・ホガスは銅版画『ジン横町』で、当時の悲惨な状況をおどましく描いている。この頃ジンに溺れて神経と肝臓をやられた労働者が巷にあふれ、生活に苦しむ主婦もこの安酒に走り、出生率は低下した。政府は当初、ジンに対する税金を引き上げることで事態の改善を目指したが、抜本的な解決には至らなかった。

そこで政府が次に打ち出した政策は、悪魔の酒ジンに代わって、健全な酒ビールを奨励するというものであった。同じくホガスの手になる『ビール街』では、陽気にこの酒を楽しむ人々の姿が表されている。この版画には「ビールよ、わが島国の至福の産物」で始まる韻文が添えられており、それはイギリスの酒ビールを高らかに称揚する。しかしあの、

避雷針を発明しアメリカ独立宣言起草委員も務めたベンジャミン・フランクリンは、イギリスにおけるビールの悪弊をも指摘している。彼は若い頃ロンドンで印刷工をしていたことがあるのだが、その自伝では、朝からビールを飲んで仕事をする職工たちの振る舞いを、「じつに忌まわしい習慣」だと述べている。

また周知のとおり、イギリスは産業革命発祥の地でもあるが、そこでは勤勉な労働力を求める産業資本家らが、たびたび禁酒運動を展開した。1832年にはプレストンで、「人を酔わせるすべての酒を断つことをここに誓う」という、英国初の禁酒の誓約が交わされた。この運動は、強調のため「完全」を意味する「トータル」の語頭の「ティー」を重ねた、「絶対禁酒」(teetotal)という造語を生み出した。20世紀に入り両大戦中には、禁酒主義者らがアルコールこそ不倶戴天の敵と再び氣勢をあげたが、従来から特にビールは飲み物であると同時に食べ物でもあり、また気晴らしの道具であるとも考えられており、政府は国民の士気を高め、彼らの不屈の精神を維持するために、まともやこれを利用するのである。

しかしじつのところ、イギリスでの一人当たりアルコール消費量は、1870年代をピークとして下降線をたどっている。それは紅茶を始めとする他の飲み物の普及や旅行、ラジオ、テレビ、映画、それにフットボール観戦といったレジャーの多様化によるものと考えられる。それでもまだこのように、かの国は現在に至るまでずいぶんと酒に翻弄されている。私も数年前、海外セミナーの引率でイギリスに数週間滞在したとき、「酒は憂いの玉箒」とばかりに、ときおり宿舎近くのパブに立ち寄ったものだが、この国自身にとって「酒は百薬の長」であると同時に、それこそが心配や憂いの源でもあるようだ。

しょうなか たかゆき(准教授・英文学・比較文学)